

審査論文の要旨

本研究は、18 世紀初頭にローマ教皇庁から日本へ派遣された最後のカトリック宣教師シドティを対象とし、一次史料の精査・分析、比較史的視点を通じて、彼の任命・派遣がローマにおける布教政策全体の中でいかなる位置と意味を有していたのかを検討したものである。従来、個別的・逸話的に論じられてきたシドティ像を相対化し、その派遣を教皇庁の布教構想における象徴的かつ戦略的事象として捉え直す点に、本研究の目的がある。本論文は、ローマ教皇庁および布教聖省による布教政策の転換と、それにもとづくシドティの任命・派遣の過程を、一次史料に即して解明することを主眼とし、全体を二編構成として論じている。

第 1 編では、17 世紀末から 18 世紀初頭にかけてのローマ教皇庁における布教思想および布教政策の変化を分析対象とする。第 1 章では、トリエント公会議以降の教会改革を背景に、スペイン・ポルトガルの布教保護権に依拠した国家主導型布教体制から脱却し、教皇庁が自律的・中央集権的な布教政策を構築していく過程を検討した。その中で、布教聖省の成立背景と理念を整理し、こうした制度的転換の文脈においてシドティ任命の意義を位置づけている。

第 2 章では、中国典礼論争を中心に、イエズス会の現地適応主義と布教聖省との対立構造を分析した。この論争が中国にとどまらずアジア全域の布教戦略に影響を及ぼし、布教聖省がイエズス会に代わる布教主体を模索する契機となったことを明らかにしたうえで、シドティの代牧任命がその戦略的対応の一環であったことを示している。

第 3 章では、シドティの日本上陸後、彼に関する情報が出島からバタヴィア、さらにローマへと伝達されていく経路を、情報史の観点から検討した。出島の VOC（オランダ東インド会社）商館日誌やバタヴィア政庁文書、布教聖省宛書簡などを用い、教皇庁がいかなる情報環境のもとで代牧任命という判断に至ったのかを具体的に跡づけている。

第 2 編では、シドティの日本語習得と運用に焦点をあて、一次史料に残された言語実践の成果から、その形成過程を遡及的に再構成している。第 1 章では、屋久島・長崎から江戸に至る尋問過程を分析し、日本における通訳環境および日本語運用の実態を検討することで、「通じなかった」経験と「通じた」場面の差異が生じた条件を明らかにした。

第 2 章では、1704 年から 1708 年にかけてのマニラ滞在期に注目し、日本人居住区との接触、布教活動（聖ヨハネ病院の修復、セミナリオの創設、布教基金「オペラ・ピア」の設立）との関係、学習機会と制約を分析することで、日本語学習がいかなる社会的環境のもとで進められたのかを具体的に示している。

第 3 章では、シドティのローマにおける渡日準備期に焦点をあて、日本語教材や日本関連文献、携行書籍の内容と性格、ならびに布教聖省が整備していた宣教師養成環境との関係を検討することによって、彼の日本語学習の基盤がどのように形成されていたのかを分析している。渡日前から一定の学習環境と知的資源に接していた可能性を具体的に示し、彼の日本潜入が偶発的な行動ではなく、若年期から計画性をもって準備されたものであったことを示唆している。

終章では、以上の分析を踏まえ、シドティの代牧任命が当時の教皇庁における布教戦略

の中で占めた位置を総括している。日本・中国・チベットといったアジア各地域の布教状況を比較することにより、布教政策の理念が地域ごとに異なる条件のもとで実践され、その結果として政策の有効性に限界が生じたことを総合的に論じている。

本研究は、従来の布教史研究において十分に論じられてこなかった、出島・バタヴィア・マニラといった地理的結節点に着目し、布教政策と情報流通、さらには宗教・政治・商業が交錯する構造を明らかにした点に大きな特色がある。シドティの任命と行動を比較史的視点から捉えることにより、布教聖省が構想した制度的理念が確立されつつあった一方で、実践では必ずしも成果を結ばなかったことを、具体例を通じて示している。

結論として、本論文は、シドティを殉教者像や思想史的な挿話に還元する従来の理解を相対化し、近世後期における教皇庁の布教政策の転換とその限界を体現する存在として再定位したものである。彼の派遣は、修道会に依存しない直接布教という制度的志向を最も明確に示した事例であると同時に、その理念が東アジアの現実に適応し得なかったことを露呈する契機でもあった。シドティがもたらしたのは布教の成功ではなく、むしろ距離と情報環境の制約のもとで布教が直面した困難そのものであった点が、本研究によって明確に示されている。